

臨床倫理メデイエーション

国立大学法人山形大学医学部
総合医学教育センター

准教授 中西 淑美

57 対話と会話

2022年の幕開けである。人生は刻々と過ぎゆく時間の中で営まれる。

2019年末以来、SARS-CoV2ウイルスによる世界的パンデミックの時間が過ぎた。この間に α （アルファ）株から始まり θ （オミクロン）株と名付けられた変異株が続々と出現し、3密回避、3分間手洗い、マスク装着が日常の風景になってきた。

With coronaの社会は、オンライン授業やICT化が進んだ。衣食住状況が変化し、隔離化や、黙食など、3密を避けるために直接対話の場は、格段に少なくなった。教育では、これまでの連載でも述べたようにAI化やアクティブラーニングの推進が提唱されている。新しい

テクノロジーは仮想現実に向かい、その中では、創造的な思考力や対話力をどうやって育むのか、情報伝達の形態や有り様が問われている。

それは「会話と対話の違い、対話とは何か」を考えさせる。

人と人との関係に、生や時間を息づかせる対話の「意味」について本稿では考えてみることにする。

1. 対話と時間

人生には2つの時間があると、筆者は2019年3月号で、2つの「時間」について述べた¹⁾。それは、ギリシア語で、「時」を表す言葉として、

クロノス (Χρόνος) とカイロス (καιρός) という2つの時間である。「クロノス時間」は、過去から未来へと一定速度・一定方向で機械的に流れる連続した絶対的な時間を表現し、「カイロス時間」は、一瞬や人間の主観的な時間を表すこととされ、内面的な相対的な時間を指すとも言われている。クロノスが連続的で一直線上の量的な時間であるのに対して、カイロスは奥行きを持った次元で示される、質が体现されるチャンス、可能性の時間でもある。新年を迎え、人生での質的な「時」である、この「カイロス」の時間を大切にしていきたい。人生には、さまざまな好機が訪れ、そのカイロスの時間は二度と来ない大切な意識する「時間」ともいえる。

対話と時間は、生命と時間と言い換えることもできる。多くの著名な哲学者の論説や言葉を用いるには膨大な論考になり、筆者にはその力もないので、ここでは広井良典の「生命と時間」から引用したい。「時間」が、直線的な時間に代表されるような形象としての「時間」であるとすれば、…中略…すなわち、どのような形象にせよ、そうした「時間」は主観的契機による構成ないし構造化の産物であり、あえて二元論的な構図を前提として言えば、「実在」の

側にそれ自体として存在するものではなく、「意識」のそばに存在するものである、と」⁽²⁾。

つまり、広井は、①実体的な形象としての「時間」と、②の根底には③動的秩序としての「時間」があり、さらに、②の根底には③生成としての「時間」である「生命」そのものと言い換える存在である「時間」があると述べている。ここでは、時間が世界とは別にそれ自体において存在していること、「生命」の根源的な時間感覚がカイロスといえるかもしれない。私たちが生きる刻々のクロノスの時間の底にある、私たちが還つていく場所のような存在としての時間の根拠、自我の成立と共に成立してくる、人間の深部にある時間観念である。

広井はこうもいっている、「時間とは、私たちの『実在』の側にある不動の存在のように考えてしまうが、実際は、私たちの『意識』の側、すなわち、観念の側にあるものではないか」という点である」⁽³⁾。

対話とは、この『意識』の時間である。現在、私たちは、日常生活の中で、このような対話をどのくらいしているだろうか。人との交流が少なくなつた昨今では、対話する機会も減少した。家庭内ですら、お一人様仕様になりつつある。

対話とは、自分と相手の要望を慮ったり、すり合わせたり、相手を理解したり、互いに話を楽しまうとする相互交流の場や空間があることである。たとえ、そういったやりとりをしていたとしても、そこに、何かの問いについて考えたり、自分の考えをまとめたり、誰かとの間での面倒な対話は少ないのではないか。

人として生きる生命の時間は限られている。カイロスの「時間」を増やすには、人や関係性、さらに、対話の「場」の存在が必要である。この「場」は空間的な場ではない。また、各人の過去や未来に触れることで到達する時間的場でもない。今、ここに、自他が共に集中することで得られる「主観的時間の場」である。

2. 対話と会話の違い

日常的には、私たちは会話をしている。挨拶をしたり、声をかけたり、今日の天候やニュースなどの会話、仕事のやりとり、家人や友人との電話や連絡など、生きている限り、どこかの場面で会話をして生活をしている。これは、対話ではないのか。

対話と会話の違いとは何であろうか。

対話と会話の違いについて、小学館の『大辞泉』では、下記のように書いている。

「会話」は、複数の人が互いに話すことで、「対話」は、向かい合つて話し合うこと。

演出家の平田オリザは、この違いについては下記のように定義している⁽⁴⁾。

「会話」とは、価値観や生活習慣なども近い、親しい人同士のおしゃべりで、「対話」は、あまり親しくない人同士の価値や情報の交換、あるいは親しい人同士でも価値観が異なるときに起こる価値のすり合わせなど。

演出家らしい説明ではあるが、何となく、ナレイヴの観点からは、違和感を覚える。何故なら、会話・対話双方とも、異なる価値観や生活習慣の人たちとも会話はするし、対話もすることは、現代の多様性の社会ではよく経験する。

英語では、会話は、*conversation, a talk, a dialogue, a discourse, an exchange, a chat* である。対話は、*conversation, (a) talk, (a) dialogue, (a) discourse, (a) discussion, communication, (a) colloquy, interlocution* である。

訳は状況や内容によって変遷するし、単に (a) が付くことで区別化できるのではないよ

うであるため、英英辞典でも調べたが、前述したことに類推する事柄の記述であった。

西洋の対話は日常的な世界で営まれる言語行為より、更に言語の意味的側面をも含んでいる。

さて、確かに、人は対話をして、情報を得る。仕事や買い物、交渉など、問題解決のための対話はする。しかし、そこに、何かの真理や意味を得ようとして、互いの意見や思考を尊重し、検討し合う対話は少ないのではないだろうか。

人生に関すること、地球温暖化、核問題、政治問題、地域生活、さまざまな状況や問題に対して話し合ったりすることはある。しかし、そこに、自分との対話はあるだろうか。

相手と向かい合っても対話にならないことはあるし、自分を遮断している場合もある。

多様性や価値観の尊重の時代が言われて久しいが、価値観の違う人とあえて対話をする機会はそのそんなに多くはないだろうか。人は、自分の限界を超える問題に対しては、それを回避し、無関心を装ってしまうかもしれない。

対話とは自他共に面倒な言語行為である。

特に、考えの異なる相手、自分が苦手、嫌悪感を抱く人との対話は、ストレスフルになりやすい。関係性を構築することは、困難にもなり

やすいし、まず感情的に落ち着かないであろう。

河野は、対話を次のように定義している⁸⁾。

「対話とは、真理を求めめる会話である。対話とは、何かの問いに答えようとして、あるいは、自分の考えが正しいのかどうかを知ろうとして、誰かと話し合い、真理を探索する会話のことである。ただ、情報を検索すれば得られる単純な事実ではなく、きちんと検討しなければ得られない真理を得たいときに、人は対話する。それは、自分を変えようとしている人が取り進むコミュニケーションである」。

私たちは、生育環境の中で、言語を身につけ、私たちが学んだ言葉で表現し、意思疎通し、意思決定し、他者の言葉を通して、他者の在り方や存在を知り、自分自身もそこで、応答を学んでいく。そこには、発話や行為の文脈がない場合もあるし、コミュニケーションとは言えない状況もあるだろう。私たちは、限定された時間の中で、言語活動を身体化し、いろいろな振る舞いや脳に刺激を与える新しいことを学んでいた。

筆者の考える会話と対話の違いは以下である。会話は、模倣を経て、つまり、他者の言葉を経て、自身の表現や理解を助け、他者との情報

交換になる他者との言葉に対する何かを獲得するための身体活動の応答である。

会話は考えを異なった方法で伝えることであり、非言語・準言語・言語を通じて静的なものから、動的なものへ形成されていくことである。

他方、対話とは、私たちの五感を通じた言語活動である会話（発話）が、他者の言葉に対する応答のみならず、他者を通して語られる自身の声・存在を聞き、自他の情報共有を超えた、ポリフォニック（多声的）な次の発話や言葉への橋渡しをして思考や意味や時間を共有していくことである。つまり、対話はナラティブを拓くし、ナラティブとは対話で拓かれる。

対話とは、動的な会話が個人的な実態のあるものになり、それが、動態的に関係性のある社会的なものに構成され、創造的な自発的なプロセスとなることなのである。

3. 会話から対話へーポリフォニック (Polyphonic: 多声的)

対話はポリフォニック (Polyphonic)、すなわち多声的である。

医療メディアエーションは、異なる価値観、異

なる立場の人々に寄り添い、その「場」で、緊
ぐことを志向する。それぞれの語りに意味があ
る。一つ一つの言葉を尊重していくのである。

医療メデイエーションは紛争対話と決めつけ
られることが多いが、そうではない。前項で述
べたように、医療メデイエーションの目指す協
働実践とは、生き生きとした自然で自発的で、
関係性のあるプロセスを希求する。対話の一つ
の概念であり、難しい対話へのアプローチであ
る。複雑に絡み合った前提のある対話では、医
療メデイエーションを駆使する人が、疲弊しな
いように考案している。自身を見つめ、受容し、
自身の存在を認めて、肯定する。そのうえで、
他者の受容と尊重、他者の存在、他者への承認、
共感へと紡がれていく。つまり、会話を対話に
していくのである。面倒な対話の「場」に立ち
会い、各人が自身を見つめ直すような「場」で
あるため、自身の対話に対するナラティヴを整
えておく必要がある。

医療メデイエーターは自身を大切にす。そ
の役割の中にも、そして元なる自分自身も、相
克している両当事者自身も、複数の声を持って
いる存在であることを忘れないようにしよう。
そのうえで初めて、相手を尊重できる対話が始

まる。

「私を信じてください」ではなく、「私はあ
なたを信じます」という姿勢が対話を拓く。

刻々と過ぎゆく時間の中で、カイロスの時間、
チャンスはそうそうあるものではない。

クロノスの時間とカイロスの時間が融合され
た対話の時間には、必ずナラティヴが拓かれて
いる。私たち自身の中に、対話の時間を開く扉
がある。

すべての言葉が、多重の声を持ち、その一つ
一つで論争が起きやすい。百色の毛糸の糸が絡
み合うように、それらの声の一つ一つは複数の
回路を作り、声を創り、語りを拓いていく。

その声の一つ一つを解いたり、紡いだり、い
ろいろな声を合わせたりしながら、ポリフォ
ニー（多声音楽）を奏でていくのである。

他者や自身のなかにあるさまざまなコンフリ
クトを恐れないこと、待つこと、あきらめない
こと、そうすれば、生み出される、創造されて
いく対話になる。それが、医療メデイエーショ
ンでの対話の4つの段階である。対話の遮断は、
カイロスの時間の遮断かもしれない。

対話は創造力や思考力を養成する。対立は否
定的なことばかりではない。対立のあるところ

には信用や信頼が元々は在ったのである。対立
は通常、関係性のないところからは生じない。

他者との多声的な相互支援が、意思決定を導
いていく。

河野は言う。「声の中に自分の位置づけを見
出していく。これが対話である。私は自己のう
ちに複数の自己を養っているからこそ、他者の
中の複数の他者と響きあい、共感し、反発しあ
うことができる。」⁶⁾

おわりに

会話を無理に対話にする必要はない。ただ、
そこに関係性を求めたり、何かを想像したりす
ることを厭わないのであれば、時間がない時こ
そ、会話を対話にしていくことに存在を見いだ
せる。

生命は、対話的な存在である。会話を対話に
するためには、多声的な自分の存在を自覚して、
自らの声に耳を傾け、そして、それをたった一
つの意識にしてしまわないことである。

人ではなく、あなたから始めることが、はじ
まりの一步になる。

まずは、対話を遮断せず、向き合い、自分と

そこに集う人を尊重し、ポリフォニーとして対話が奏でられていくことへの姿勢が重要なのではないだろうか。

それは、時間と関係し、対話によって「生」につながる存在を尊重することになっていくのである。

文

参考文献

- (1) 中西淑美…「臨床倫理メデイエーション31身 近な人の生と死にある『時間』と倫理」、『文化連情報』、2019年3月号、Vol.492、34―38頁
- (2) 広井良典…『生命と時間―科学・医療・文化の接点』、勁草書房、1994、総頁244、230頁より引用
- (3) 前掲(2)まえがき3頁より引用
- (4) 鎌田修・嶋田和子…『対話とプロフィール シーコミュニケーション能力の広がりと高まりをめざして』、凡人社、2012、総頁198、31頁引用
- (5) 河野哲也『人は語り続けるとき、考えていない―対話と思考の哲学』、岩波書店、2019年、総頁258、引用2頁
- (6) 前掲(5)引用140頁

10月30日(土)日本文化厚生農業協同組合連合会 2時間版×2

―医療メデイエーションのIPIを学ぶ―

今日の学習目標：
医療メデイエーションの現場実践のためにIPIを学ぶ



山形大学医学部 中西淑美
日本医療メデイエーター協会 (JAHM) 理事 教育担当

医療メデイエーションのIPIを学ぶ

厚生連医療メデイエーター実践者スキルアップ研修会を開催

2021年10月30日、国立大学法人山形大学医学部総合医学教育センター准教授 中西淑美先生を講師にお迎えし、オンラインにて厚生連医療メデイエーター実践者スキルアップ研修会を開催しました。研修には、午前と午後の部を合わせて6厚生連11施設から17名の方にご参加いただきました。

一般にメデイエーターとは、対立する紛争当事者の中立的第三者を指し、紛争の解決を目指します。医療メデイエーターの多くは病院で働く職員ですが、対立する患者・医療者のいずれにも偏らない立場をとります。医療メデイエーションは、当事者同士の対話を促進するプロセスであり、両当事者の「関係構築」を図っていくことが最大の目的です。

中西淑美先生は、紛争解決学、コンフリクト・マネジメント論、臨床倫理、医療安全を専門と

されており、医療メデイエーションのモデルを構築した第一人者です。

研修では、紛争に関する両者の情報を探索して整理する「IPI分析」（語りの中から問題【Issue】、要求や主張【Position】、要求や主張の裏に隠れている真の欲求【Interest】を見つめる分析法）を再確認し、実際に病院で起こった救急外来での受付トラブルといった事例に取り組み、理解を深めました。

医療メデイエーションにとって重要なことは、申立人と相手方の対話の中で両者の真の欲求（Interest）を理解し、それを互いに共有できるように「導く」ことです。はじめに両者の争点（Issue）があり、そこから両者の主張（Position）が浮かび上がってきます。そして、各々の欲求（Interest）が動的に発生します。情報共有に至るまでのプロセスを通して、両者は互いの思いや認識の齟齬を知ることになり、合意形成へと繋がっていきます。

そのため、医療メデイエーターには、両当事者がお互いの本当の欲求（Interest）に気付く、深い情報共有が図れるよう、対立軸での緊張した関係を解きほぐし、両者の対話が促進されるようにナビゲートしていくことが求められています。

ます。

医療メデイエーターの養成に力を入れることで、問題が早期解決し、紛争解決に係る関係者の労力の軽減といった効果も出ています。また医療メデイエーションは、真の欲求（Interest）へのアプローチができ、双方が納得した形で問題解決できるため、話し合い終了後も患者と良好な関係を築くことができます。院内で医療メデイエーターが活躍することで医療の質の向上にも大きな成果が出ています。

本研修終了後、受講生の方から「日頃考えていたことを、IPIの考え方ですっきり整理できた」、「IPIについて深く学ぶことができ、現場の事例を整理することができた」、「本日より、すでに複数の苦情事例報告を、IPIの考え方でまとめて報告しています」との嬉しい声が寄せられました。

本研修の開催にあたり、講義をしていただきました講師・ファシリテーターの皆様、そして全国各地よりご参加いただきました受講生の皆様に感謝を申し上げます。

（日本文化厚生連 総合事務センター）

主任 馬場真弓

